

# 重要文化財 東京藝術大学所蔵「弥勒来迎図」現状模写

博士前期課程 日本画領域 高坂隆介

## 《原本について》

重要文化財 「弥勒来迎図」絹本着彩 鎌倉時代後期 13世紀末 縦89.8×横45.6cm 東京藝術大学所蔵

本作品は、天空にある兜率天より山岳を回り込む様に弥勒菩薩が雲に乗って来迎する姿が描かれており、その着色法や様式などから13世紀末に制作されたと考えられている。兜率天に五百億の天女がいると「弥勒上生教」に説かれているため、弥勒菩薩の周りに天女が多数描かれていると思われる。画面右側には空海、不動明王が描かれ、その下方には往生者が描かれる。往生者が摩頂を受けているのは、戒律を守り、如来からの好相を獲得した姿を現していると考えられている。原本彩色においては、絹の裏から絵具を彩色し量感を出してから、表から薄く絵の具を塗る裏彩色の手法がとられている。線描は本尊の肉身や冠等は極細に描かれており、山岳については抑揚のある豊かな線で表現されている。

また、金泥、銀泥暈し、金箔等の手法が多用されており、截金と金泥文様が併存する点も興味深く、この金属の輝きは原本の荘厳性をより高めていると考えられる。そこで本研究では絵師の制作過程を追体験し、截金や金泥、箔での表現を現状模写で再現することで、絵師の弥勒菩薩を表現しようとする思いや、荘厳の精神について学び取りたい。

## 《模写の工程》

### 1. 上げ写し

作品データを原寸大コピーし、その上に礬水を引いた石州紙を当てて線描きをし、白描画を作る。絹に写し取る作業を考え、濃い目の墨線で、剥落を避けて上げ写しをした。

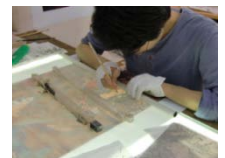


図1 上げ写し

### 2. 線描

原本の織目に比較的近い絹(タテ80目 ヨコ125目 2本入り 31中)を砧打ちし、滑らかにして描きやすくする。白描画を、木枠に張り込んだ絹の下に敷き、濃さを四段階に分けた墨で線描きをする。本尊の肉身など最終的に朱線になる部分は特に濃さに注意を払った。



図2 白描画



図3 古色付け後

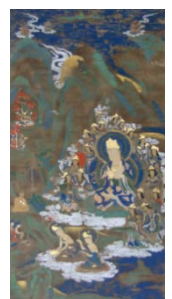


図4 裏彩色

### 3. 古色付け

原本の経年変化による色の変化や描写を近づけるため、絹に古色(ガンボージ+藍+洋紅)を付ける。本尊部分は群青や緑青などの跡を濃く、肌など明るくきれいに残っている個所を薄く表現した。

### 4. 彩色

量感を出すため、各部分の裏彩色を行う。色が明るく、基準にしやすい雲から彩色をはじめ、本尊の肌色、衣などの群青、緑青の色味を決定していく。(使用絵具、青：群青、緑：緑青、赤：朱 肌：黄土具)

### 5. 金属材料

本尊彩色部分等の上から截金(金箔を細く切ったものを糊で貼り付け、文様等を施す手法)を施す。金箔を切った太さが均一になるように注意し行った。



図6 截金

## 《まとめ》

天女の衣などに金泥線を用いることによって、柔らかく背景に馴染むような表現ができた。それに対して本尊の截金は鋭く、文様自体が光を放つような強い表現となった。また本尊の肌色は絹の裏から黄土具を塗り、表から金泥を薄く何度も塗り重ねることで肌の柔らかい質感を出し、それに対して冠は金箔を絹の裏から貼り、装飾具の固い質感を出した。これらによりさまざまな金の表現が空間の中に納まり、バランスのとれた仕上がりとなった。これは絵師が全体のバランスを考え、金属を配置したためだと考えられる。また弥勒菩薩を金属で装飾していく過程で本尊がより崇高なものに感じられ、敬意をもって模写をすることができ、大変貴重な体験となった。